季報

二松学舎大学附属図書館
Quarterly Report

No.120　2024（令和６）年 11 月

P2　絵本のマテリアリティ
——色や音のことなど　土井 清美

P3　読書は面白い　花川 麻実子

P4　篆刻家山田正平と二松學舍　神野 雄二

P5　築地・佃島文学散歩

P6　お役立ち施設の紹介　市谷の杜 本と活字館

P7　本学所蔵資料紹介　/　作家のおやつ巡り⑩

P8　本学教職員著書紹介

絵本のマテリアリティ
― 色や音のことなど

文学部都市文化デザイン学科　准教授　土井 清美

私は絵本が好きだ。より正確には、絵本を見たり聴いたりしたことを思い出すのが大好きだ。ヴァルター・オングの言葉を借りつついえば、私はもはや「読み書きのできる」人間でありながら、そこには、言葉が視覚的な存在をもたず、音と時間が特別な関係をもつ世界と、その外側にある視覚的に静止した世界を同時に想起する喜びがある。さらにはオングのいう、オラリティとリテラシー（Ong, 1982）※のどちらにもあてはまらない、もう一つ別の「文化」が広がっている。

私は優れた絵本に囲まれて育った。ここでの優れた絵本とは、作中の絵が、ストーリーの単なる添えものではなく、その一枚一枚が別の物語を持ちかけてくるような力をもった本である。絵描きだった私の母は、実家に戻るたびに、都内の書店を回っていろいろな絵本を買い込んできてくれた。エロール・ル・カインの 『おどる 12 人のおひめさま』 『いばらひめ』、ウクライナ民話 『てぶくろ』など。なかでもビネッテ・シュレーダーの『ラ・タ・タ・タム―― ちいさな機関車のふしぎな物語』『お友だちのほしかったルピナスさん』は、子供の頃を通じて、ストーリーをまったく理解せぬまま、ぼろぼろになるまで「聴き」「見」込んだ本である。私が大人になり、子の母の立場から見返すに、訳文も難しく文量も多い頁もあり、頁を繰るのに少し時間かかる。子供の頃の私は、読み聞かせてくれる親の声を音ととして聞き流しながら、小さな機関車を取りまく荒んだ野や町と、そこに広がるどこか懐かしく暗い情緒を胸いっぱいに吸いこんだものだった。陽が沈んだ頃合い、暇そうに足を組み微笑んでいる一人の男。窓をふいた雑巾から垂れ落ちる大粒の汚れ。パタコトン氏とハンプティ・ダンプティ氏が薄明りの残る野原へ消えていく。その手前で眠るルピナスさんと大鳥ロベルト。描かれたものはときに静止し、ときに躍動する。眺めいっていると、親の声はふと止まり、次のページがめくられ、次の絵画の鑑賞が始まる。

本を読んでもらうことを、私は音の連なりとして楽しんだ。エリック・カールの『はらぺこあおむし』の初めの方で、次のような一文がある。「にちようびのあさです。ぽんっとたまごからちっぽけなあおむしがうまれました」。私の父は、ぽん、のところになると、必ず指を口の中につっこみ、声ではけっして出せない音を勢いよく立てた。それを聞いたとたん私の頭はその後の物語りを耳の前で流し 、音の連鎖と中断の繰り返し、本の絵が発するめくるめくイメージ世界へと旅立つのだった。

子供の頃に食い入るように見、音を味わった絵本の体験を、子を持つ親になってから思い返す。あの明度が低い本の絵の群れは、幼い私が感じていたうら寂しさや不確かさのようなものを直接的に受け止めてくれるものだった、と。大人になった今からすればそれなりの説明になるが、おそらくそうした言語に回収されない豊かな経験であったことは間違いない。

ただ一つ不満がある。絵の明度だ。今世紀に印刷された「ルピナスさん」「てぶくろ」「はらぺこあおむし」の色調は、私には明るすぎる。試しに実家に置いてある本と比べてみるも、昔の版の中にあったあの鉄色は、ビリジアンではけっしてなかった。紙質の変化や印刷技術の進展によるものか、本の劣化によるものか、知る由はない。しかし、これだけは言える。絵本の絵はけっしてどれも同じではない。「世代を超えて読み継がれる本 」などと言われ、あたかもその内容や色調が同一であるかのように見なされがちだが、実際は違うのだ（既にそれに類する研究があるかもしれない）。本は読まれるもの、という先入観をいったん措き、聴くもの、見られるものという考えを真剣に受け止めるとき、紙とインクから成り、そして人の音を誘発する本のマテリアリティが立ち現れるように思われる。

※『声の文化と文字の文化』著者：W.J. オング　発行：藤原書店
請求記号：801.03-K

読書は面白い

国際政治経済学部国際政治経済学科　専任講師　花川 麻実子

子供の頃から地域の図書館によく行って、たくさんの本を借りた。特に娯楽らしいものがあまりなかった時代なので、家族の人数分のカードを使って大量に図書館の本を借りるのが我が家の日常だった。目の前にある面白そうな本を手にとっては家に持ち帰るときのわくわくした気持ちを今でも覚えている。

今は英文学が専門ではあるが、子供の頃は、日本人作家の本を読む方が好きだった。なぜかというと、今から思えば翻訳本にあたる外国人作家の物語は、どうしても読んでいる中で意味が通じないと感じてしまう箇所に出会うことがあったからである。そういう経験を幾度かするうちに、私は外国人作家の本は少し読みにくい箇所があると子供心に思うようになっていた。おそらく当時の翻訳本は今ほど読みやすくはなかったのではないかと推測する。

最近、いわゆる世界文学や児童文学が、今をときめく英文学者の先生によって翻訳しなおされているのは、そういった昔ながらの文章の読みにくさを見直すという背景もあるのではないかと私は感じている。今の子供たちが楽しめる、違和感のない日本語に訳し直す余地がきっとあるのだろう。

大人になった今でも児童文学書などを手に取って、この先生が翻訳されたのならぜひ読んでみたいと思うこともある。そして、そういった先生方の翻訳で文学に出会うことのできる今の子供たちがとてもうらやましいと思う。

子供の頃の翻訳本への違和感という観点からみると、日本文学はとても安心して読めた。今も、日常の中で昔読んだ本が思い出されることがある。

例えば、新学期に大学で出席簿にある学生の名前を読み上げて確認する時には、いつも『二十四の瞳』の小石先生と可愛い生徒たちのことが心に浮かぶ。緊張しながらこちらを見ている学生たちを見ると、小石先生が目にした光景と私の目の前に広がる光景が一緒なのではないかと思えてしまう。子供たちと小石先生との和やかなふれあいや小石先生を見つめる子供たちのあどけない姿を私は自分自身と学生達との間にそっと感じてしまう。子供時代に読んだ作品は、こうやって今も私の中で生きていると感じる。

子供の頃は近所の図書館に通ったが、大学に入ってからは、大学の図書館にとてもお世話になった。母校のヴォーリズ博士設計の図書館は、別世界のように美しく神聖な気持ちにすらさせてくれた。また、図書館の窓から見える中庭の景色は圧巻で、ずっと見ていられるほど美しく、入学したばかりの時は毎日のようにその景色を見に行った。その美しい空間は、図書館で出会う本がどこか特別で、異空間へ連れ出してくれる読書という経験にとても合っていたように思える。

母校で教わった内田樹先生が『図書館には人がいないほうがいい』（2024）の中で、図書館というものは〝「聖なる場所」の一種だ〟とおっしゃっているが、まさに私が経験した図書館という空間はそのような場所だった。

今まで数えきれないほど図書館には通っているが、読書を通して、自分が会うことも話すこともできない人や、異なる時代の中にタイムスリップして対話をすることは、この上ない楽しみであり心が浄化されていくような感覚を覚える。読書をする日常は、やめられない。

心の引き出しの中にたくさんの本が詰め込まれていれば、きっと人生の困難に出会った時にも道標になってくれるような気がする。これからもお気に入りの本をいつも心の中に入れておきたいと思う。

神戸女学院大学図書館（神戸女学院大学提供）

篆刻家山田正平と二松學舎

二松学舎大学元非常勤講師・熊本大学名誉教授　神野 雄二

山田正平（1899 ～ 1962）は、日本を代表する、詩・書・画・篆刻の四絶を良くした文人篆刻家である。

正平は、日本の篆刻の祖として「印聖」と称される高芙蓉（1722 ～ 1784）の系譜に連なる昭和前期を代表する印人である。清朝以後「詩書画」三絶の文人活動は、文人必須の条件として詩・書・画に篆刻を加えている。これらは四絶としてその一体化された文人活動がなされて、始めて文人の理想郷に到達できる。つまり一つでも欠けると、文人としての教養は成り立たないとされている。

本文では、二松學舎に学び、四絶の芸術境を目指し、終生孤高の境地を保ち、篆刻芸術に命を賭した、正平の生涯とその芸術の一端に触れるものである。

さて私は、山田寒山・正平や、日本の篆刻や篆刻家を研究して 40 数年になる。2021 年に、東京学芸大学から「山田寒山・正平を中心とする篆刻家の実証的・総合的研究」により、博士学位（学術）を授与された。同研究のもととなったのが、『日本篆刻家の研究―山田寒山・正平を中心として―』（発行：熊日出版 2017/3 請求記号：739-N）である。

正平は、1918 年 20 歳の頃、二松學舎に学んだ。二松學舎に入り漢学者三島中洲（1830 ～ 1919）に漢学を学んだ事が書かれた、未定稿とおぼしき文章が山田家に残されている。ここに紹介する。この中で述べる君は、誰であるか不明である。正平の二松學舎での生活の一端が綴られており興味深い。

> 大正中期、君と僕とは二松学舎で二三年同寮して学んだ関係である。当時三島復先生が舎長で、中洲老先生には正月に一度、くらい、隣接の三島邸へ行って講話が聞ける程度であった。しかし学舎の講師としては土屋鳳洲、児島獻吉郎、安井小太郎、岩渓裳川など勿体ないような名家が薀蓄をかたむけての講義がつゞけられていたのであった。この先生達はみんな相続いで物故し給いてすでに遠い昔となって、現在はたゞ那智先生のみ御健在と承る。僕たち当時の少年も今は白髪となってしまった。うけた講義の内容は殆ど忘れ去ったようだが学道に鍛えぬかれた先生達の人柄から受けた感銘はなほ昨の如く強く蘇みがへり、はなはだ貴重のものになっている。中洲先生に接したのは一二度で印象はまことに淡いが、話しの一節に「長生きするにも、すべてにも、無理をせぬことが大切だ」との言葉が耳底に残っていて、折りに触れ思い出すのである。復、舎長が伝習録を、安井先生が荘子を、那智先生が易を講ぜられての環境であってみれば、この一言、今にしてますます含蓄ゆたかに感ぜられるのである。当時、同寮であった学友でいまなほ互に寒暖の消息をたゝない人も二三あるが別した懐かしさは禁しがたい、二松学舎独特の箱めしをつゝき合い、南京虫に悩された仲はどこか血のつながりがあるのであろうか。
>
> 山田正平
>
> ※ 旧字体は新字体にあらためた。

また、二松學舎に入塾する頃の心境を、綴った一文がある。

> 当時、私の心境は、書も画も篆刻も結局、学問そして人でなければと、漠然ながらも希望と焦燥を覚え始め煩悶の極であつた。越後から一旦京都へ舞い戻り修学のところをさがしたが得られず、意を決しまた東京へ来てついに二松学舎へ入塾したのである。（「会津先生と私」『書品』79 号　発行：東洋書道協会 1957/4　請求記号：728.05-S）

正平の刻印における近世以後の印の歴史を鑑みて、特異点を列挙する。

1、空間処理の斬新さ（疏密の法則を極限まで突き詰めた）
2、刀法における新生面（毛筆で書かれた線の刀法への応用）
3、陶印における妙趣
4、刻字における芸術性

最後に、本文に関する図書館収蔵の参考資料を挙げておきたい。

①『〈回顧〉山田正平 : 東京学芸大学における教育者としての側面 : 付 篆刻講義ノート』
編者：岩切誠・川合広太郎・杉山勇人　発行：東京学芸大学書道科硯心会 2004/7　請求記号：739-K
②『山田正平作品集』　編者：山田喜美子　発行：木耳社 1976/10　請求記号：739.8-Y
③『正平鐵筆』（第 1 ～第 6 ・目録）　編者：山田潤平　2013/9　請求記号：739-YS-1~6・目

築地・佃島文学散歩

今号では新富町駅を起点に築地・佃島周辺の文学史跡を紹介します。

プロレタリア文学の作家・小林多喜二（1903 ～ 1933）は、1933 年 2 月 20 日に東京赤坂福吉町で共産党員 1 名との街頭連絡中に逮捕されて「築地署」に留置されました。当時は治安維持法改正など、共産党員らへの弾圧・粛清が展開されており、特高警察から拷問を受けた多喜二は、築地署の裏手にある「前田医院」に運ばれましたが、間もなく死亡が確認されました。

築地駅方面に歩くと、里見弴（1888 ～ 1983）筆による「築地小劇場跡」のプレートが壁面に埋め込まれた記念碑①があります。築地小劇場は、1924 年 6 月に開場した新劇の劇場で、翻訳劇や創作劇を多数紹介しましたが、1945 年 3 月の空襲によって焼失しました。

聖路加国際病院の脇の歩道には、「芥川龍之介生誕の地」の解説板②が立てられています。芥川龍之介（1892 ～ 1927）は、この付近で耕牧舎という牧場を営んでいた新原家の長男として生まれましたが、生後 9 ヶ月の頃、母の病が悪化し、母方の実家・芥川家のある両国へと転居、後に芥川家の養子となりました。

佃大橋を渡り、月島駅前を抜けた隅田川派川沿いには、「海水館跡の記念碑」③が建てられています。海水館は 1905 年に開業した割烹旅館で、閑静で美しい景観を求めて、多くの文士・画家・俳優が止宿しました。なかでも島崎藤村（1872 ～ 1943）は 1907 年から約 1 年止宿しながら長編小説『春』を、また、藤村との交流から海水館に滞在することになった小山内薫（1881 ～ 1928）は長編小説『大川端』をこの宿で執筆しました。建物は 1923 年の関東大震災で焼失してしています。

佃島を舞台に、古書店で働くふたりの男の友情を描き、1992 年に直木賞を受賞した出久根達郎（1944 ～）の『佃島ふたり書房』も一読をおすすめします。

市谷の杜 本と活字館

どんな施設？

活版印刷を中心とした本づくりの文化施設です。コンセプトは「リアルファクトリー」。

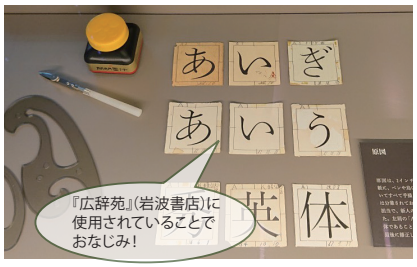
文字のデザイン、活字の鋳造、印刷、製本までのプロセスを展示しており、印刷機が稼働する様子や職人が働く様子を見ることができます。また、印刷・製本ワークショップなどの体験イベントも実施しています（要予約）。

建物は、大日本印刷の前身 秀英舎の 1926 年建築当初の姿に復元されたもの。建築意匠も見どころです。

どんな資料がある？

活版印刷の本づくりの流れが分かる

❶活字の元となる字をデザインします。展示の書体は「秀英体」です。



❷１字ずつ母型（字の形に凹んだ型）を作ります。

❸母型に鉛合金を流し込んで活字（ハンコのような凸型）を鋳造します。

❹活字を１字ずつ組み合わせて１ページ分の版を作ります。

❺版にインキを付けて紙に押し当て、印刷します。

❻印刷した紙を綴じて、本の形に整えます。

大正時代の建築意匠

1926 年（大正 15 年）竣工当時の姿を復元しています。

「記録室」では、建物復元のタイムラプスや市ヶ谷周辺の記録写真など映像資料が見られます。

印刷の様子や建物復元の様子など、一部の映像資料は YouTube でも公開しています
https://www.youtube.com/@ichigaya_letterpress

利用するには？ 入場無料

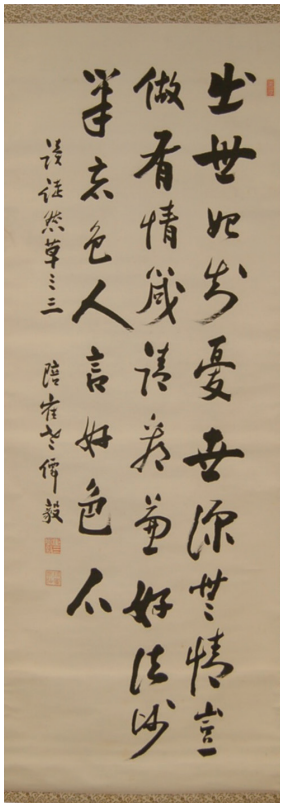
開館日時：10:00 ～ 18:00
＊休館　月曜・火曜（祝日の場合は開館）、年末年始
アクセス：〒 162-8001　東京都新宿区市谷加賀町 1-1-1 大日本印刷内
（東京メトロ市ヶ谷駅より徒歩 10 分、JR 市ヶ谷駅より徒歩 15 分）

詳しい情報、イベントの申し込みはウェブサイトから　https://ichigaya-letterpress.jp/

本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅　讀徒然草之三　明治四一年

三島中洲（一八三〇～一九一九）…本学創立者。明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾二松学舎を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九一二）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



出世始知憂世深　出世　始めて知る　憂世の深きを
無情豈做有情箴　無情　豈に有情の箴（しん）と做らんや
請見兼好法師筆　請ふ見よ　兼好法師の筆
忘色人言好色心　忘色の人は言ふ　好色の心

俗世を離れてはじめて世を憂える心の深さがわかるように、人は心を持たない草木などから、心を持つ人のことを学ぶことができる。どうか兼好法師の文章を見ていただきたい。好色の心を忘れた人が好色の心をどのように言っているのかを。

（石川忠久編『三島中洲詩全釈』第四巻より）

作家のおやつ巡り⑩

1884 年に上野池之端に開業した和菓子店・空也は、1945 年の東京大空襲で焼失したのち、現在の銀座並木通りへ移転しました。

谷崎潤一郎（1886 ～ 1965）は空也がお気に入りで、中央公論の担当編集だった伊吹和子は、「銀座で重子夫人と待ち合せて夕食をしたあと、ケテルではパンやソーセージ、その並びの空也では水ようかんと最中、あっちではケーキ、こっちでは果物と、買物は、夫人も私も、両手一杯になった。」[※1] と述懐しています。林芙美子（1903 ～ 1951）の小説『匂ひ菫』にも、「女中が空也の最中を運んで来た。熱い茶をよばれ、最中を食べて・・・」と空也最中が登場します。[※2]

また夏目漱石（1867 ～ 1916）は、橋口貢宛書簡（1904 年 12 月 22 日付）に、「空也堂の菓子は頗る洒落たものですな」[※3] と書いています。『吾輩は猫である』に、「主人はまたやられたと思ひ乍（なが）ら何も云わずに空也餅（くうやもち）を頬張つて口をもごもご云わしている。」[※4] と記されている空也餅は期間限定で販売されているようです。

※ 1『われよりほかに 谷崎潤一郎最後の十二年』伊吹和子著
　講談社　1994 年刊
　文中の重子婦人は谷崎の最後の妻・松子の妹
※ 2『林芙美子全集 第 9 巻』 文泉堂出版　1977 年刊
※ 3『漱石全集　第 22 巻』 岩波書店　1996 年刊
※ 4『漱石全集　第 1 巻』 岩波書店　1993 年刊

本学教職員著書紹介

『陶淵明新研究
―自己をみつめる―』

大地 武雄 著
（明徳出版社、2024 年 3 月刊行）
A5 判　315 ページ　4,500 円＋税
ISBN 978-4-89619-328-2

南北朝東晋時代の乱世と封建社会の中で生きた陶淵明（365 年～ 427 年）は、実に波乱万丈に富んだ生涯を余儀なくされ、多様な生き方をせざるを得なかった。そうした中から生まれた作品には、当然多様な心情が表出されている。これまでの文献研究を踏まえながらも、これまでの研究では明らかにされなかった陶淵明の自己を深く見つめるところから生み出された心情を中心にした視点で 136 の作品を検証して行くと、処世観、孤独感、八歳にして父と死別後、度々の肉親との死別からの死生観、身後の名、自己の戯謔化、客観化に加えて、複雑多面的な内奥の表現方法としての 2 分身化、3 分身化がある。

それ迄、一側面からしか自己の内面を描写することしかしなかったことが、今から 1600 年前の時代に、陶淵明は自己を深く見つめ 3 分身化して、形と影と神（精神）の側面からそれぞれの思いを述べ、客観的に 3 次元化して自己の内奥を描く、画期的な方法を開拓した。

その分身化の後代文人への影響として、唐代の詩人李白の「月下独酌」詩がある。李白詩は、李白と李白の影と月とを 3 分身化して酒を酌み交わす世界を詠じている。

中国ばかりでなく、陶淵明は日本でも平安時代以後明治大正時代の詩文にも、影響を与えている。中でも陶淵明に私淑した文豪夏目漱石への影響は、小説ばかりでなく、漢詩文にも決して少なくない。

漱石が若い頃、二松学舎大学の原点である漢学塾二松学舎で、三島中洲等のもとで、左国史漢や漢詩作に励んだこと、漱石自身の生涯も陶淵明と同様、波瀾万丈であったばかりでなく、40 歳の時、新聞小説家に転向したことは、陶淵明が 41 歳の時、役人を辞めて帰田したことと一致し、漱石が陶淵明の「帰去来兮辞并序」を一字一字丹念に墨書したことでも、その共感ぶりがうかがえる。特に、小説「草枕」などへの引用ばかりでなく、晩年の「明暗」執筆中の午後の漢詩に多くの陶淵明の作品からの引用があり、その影響には大なるものがあることが認められる。

名誉教授　大地 武雄

編集後記

「季報」120 号をお届けします。

今号では、教員 2 名の本や図書館にまつわるお話を紹介しました。また、本学ゆかりの篆刻家や、活版印刷の本の制作過程を知ることができる「市谷の杜本と活字館」をご案内しています。

活版の印刷物は、活字を紙に押し付けることで紙面にかすかな凹凸ができます。1980 年代頃から数が減りますが、幼い頃に読んだ本や図書館の本を思い出すと心当たりがあります。（Sh）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 120 号

発行日　2024 年 11 月 1 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ